

名門高校の校風と人脈

48

北海道小樽潮陵高校（北海道立・小樽市）

「北のウォール街」の伝統校 帝銀事件や「行動する学者」

運河に代表される観光都市として知られている。今は斜陽の街だが、明治、大正から昭和30年代にかけては港湾都市、商業都市として、北海道内はもとより全国的に小樽はその名をとどろかせていた。運河はその産業史的な遺産である。明治時代から銀行が軒を連ね、「北のウォール街」とも呼ばれていた。

北海道小樽潮陵高校の前身は北海道庁立小樽中学であり、1902（明治35）年に開校している。函館中（現北海道函館中部高校）、札幌一中（現北海道札幌南高校）に次いで道内の公立高校では3番目

の古い伝統がある。街の歴史を背負っている学校である。百十余年の星霜の中で芸術、文学、学者・研究者、政財界人あるいはスキー選手など、多くの人材を世に送り出してきた。

「同窓の画家」

立派なことだと筆者が感嘆するのは、学校が掲げる「出身者著名人」に、平沢貞通の名が堂々と明記されていることである。

48（昭和23）年1月26日に、帝国銀行（のちの三井銀行、現在は三井住友銀行） 椎名町



平沢貞通

支店（東京都豊島区）で男が行員らに毒物を飲ませ12人を死亡させた事件が起きた。帝銀事件といわれているが、この犯人として死刑が確定したのが平沢だった。しかし自白以外に決め手となる物証に乏しく、平沢を真犯人とした確定判決に疑問を持つ人が少なくなかった。このため、文化人や法曹関係者

らが死刑の執行停止や再審、恩赦の救援活動を展開した。歴代の法務大臣も死刑の執行を見送り、平沢は結局、87（昭和62）年に95歳で獄中で病死した。確定死刑囚としての収監期間は32年に及び、当時の世界最長記録であった。平沢は、旧制札幌中学（現道立北海道札幌南高校）を経て旧制小樽中学に入学した。卒業したあと日本水彩画会の結成に参加した画家だった。終戦前後にはテンペラ画家として知られた存在で、獄中でも画作に励んでいた。そんな平沢を小樽潮陵高校は「同窓の画家」として遇し、

堂々と誇っているのである。小樽市長を16年間務めた安達与五郎が平沢の無実を信じ、救援活動を続けたことも功を奏したようだ。安達は旧制小樽中学7期卒で、平沢と同期の親友だった。筆者はこの連載「名門高校の校風と人脈」の取材で全国各地の高校を訪問しているが、どの高校も犯罪者になった卒業生については口を濁して語りたがらない。なかには「卒業者名簿から抹消したい」とする高校もあるほどだ。

伊藤整文学賞

小説家として名を成した卒業生では、伊藤整がいた。小樽中学から小樽高等商業学校（小樽商科大学の前身）をへて旧制東京商科大学（二橋大学の前身）に進んだ。近代日本文学で重要な作家、文芸評論家の一人に数えられる。90年に小樽市などが創設した伊藤



伊藤 整

整文学賞が続いていたが、資金難から2014年をもって終了する予定である。

伊藤は、自伝的小説『若い詩人の肖像』で小樽中時代の厳しい授業風景を克明に描いているが、多くの卒業生は校風を「秩序だった自由」としている。

数年前には「潮陵スピリット」の統一見解を、教諭3人が作成している。「個々の中に生きている『潮陵のこころ』があり『自由』『進取』『達成』そして、ふわっと暖かい『つながり』という、文学的なまじめになったという。

伊藤のほかには小説家では戦前に多くの著作を出した岡田三郎、自称「児童よみもの作家」の山中恒、昭和時代の脚本家・八田尚之らも卒業生である。岡田は小樽潮陵高校の校歌の作詞者でもある。OGで時代小説が得意な蜂谷源は、北海道内のラジオ・テレビによく出演している。



蜂谷 源

学者では、山内兄弟の知名度が高い。兄昌之はイスラムや中央アジアの国際関係史が専門で、前東大教授。論壇によく登場し、政府の審議会や研究会の委員に起用され政策立案にも参画している。メディアでおなじみの顔になっている。2期下の弟進は西洋中世法史が専門で、2010年から一橋大学長をしている。

ロシアや中央アジアの専門家だった秋野豊は、筑波大教員を辞職して外務省に入省し、98年に国連タジキスタン監視団に参加した。山岳地帯を走行中に武装集団による襲撃に遭い、同乗者とともに射殺された。「行動する学者」であった。

整形外科医で詩人だった河野文一郎は、72(昭和47)年の札幌五輪でテーマソングになった『虹と雪のパレード』を作詞した。トワ・エ・モアが歌い、40余年の今でも親しまれている。札幌医科大学教授



山内昌之

をしていたが、弟子の一人が医師から作家に転向した渡辺淳一(北海道立北海道札幌南高校卒)である。医師では消化器外科の内野純一、ペーチエット病の権威で眼科の大野重昭らもOBである。

電気通信学者で北海道工業大学長をした林一郎、会計学者で小樽商科大学長の山本真樹夫、複雑系自然科学の田村類、医用生体工学の山本徹

経営学の高橋伸夫、交通システム工学の高野伸栄らが卒業生である。

「人間の条件」監督

経済界で活躍した卒業生としては、北の醤油造社長で地元経済界の発展に尽くした野口喜一郎、合同酒精会長をした堀末治、地崎工業社長をした三代目地崎宇三郎、日本道路公団初代総裁の岸道三、日本専売公社総裁をした東海林武雄、テレビドラマ「私は貝になりたい」の演出者でTBS社長・会長をした諏訪博、セイコーエプソン会長をした安川英昭、通産官僚出身で国際石油開発帝石社長の北村俊昭、J-R北海道バス会長の木村一郎らがいる。

さらに地元経済界では、小樽商工会議所会頭の山本秀明、副会頭の西条文雪と杉江俊太郎らがいる。

文化人では、「人間の条件」「切腹」などの代表作を持つ映画監督の小林正樹が旧制時代の卒業生である。日本を代表するワイン研究者の一人である堀賢一は新制卒である。

商業デザイナーの藤森茂男は「小樽運河を守る会」の初代事務局長になり、70〜80年代にかけて運河の保存運動の先頭に立った。小樽が観光都市になる道を開いた。

音楽では、松田真人がピアノリストであるとともに音楽プロデューサーの仕事をしている。作曲家、ジャズ・ピアニストでニューヨークで活躍中の野瀬栄進もOBである。

お笑いタレント出身の加藤浩次は、俳優・キャスター・司会者として活躍中。俳優では安宅忍が、舞台、映画で名脇役として存在感を発揮している。

ジャンプ界を牽引

小樽は背後に山がある坂の街である。近くの斜面でスキーができる。旧制小樽中は、

大正期から昭和にかけて黎明期の日本スキージャンプ界を牽引する存在であった。伴素彦は、28(昭和3)年のサンモリッツ五輪にスキージャンプ日本代表として出場し、のちに全日本スキー連盟会長をした。仕事では日本製粉の社長、会長になった。伴は前述の伊藤整と同期だった。

このほか、オスロ、グルノーブル、札幌、レークプラシッドなどの冬季五輪に出場した卒業生としては安達五郎、伊黒正次、龍田峻次、宮島巖、吉沢安司、佐藤耕一、松井孝、板垣安志らがいる。宮島は札幌五輪でジャンプ審判長をした。

新制になってすぐの50(昭和25)年の大学入試では、北海道大に153人、地元の小樽商科大に102人もの合格者を出したことがある。札幌南高校に次ぐ全道第2位だった。13年の大学入試では、北海道大に31人、東北大に2人、札幌医科大に5人、旭川医科大に2人、小樽商科大に18人が合格している。

(猪熊建夫・ジャーナリスト)
(敬称略、会社名・肩書などは当時。今回は大分県立佐伯鶴城高校)

大正期から昭和にかけて黎明期の日本スキージャンプ界を牽引する存在であった。伴素彦は、28(昭和3)年のサンモリッツ五輪にスキージャンプ日本代表として出場し、のちに全日本スキー連盟会長をした。仕事では日本製粉の社長、会長になった。伴は前述の伊藤整と同期だった。